

YORINICHI

特別展

TIME SLIP

谷根千

“寄り道”

文学散歩

谷中 ~ 根津 ~ 千駄木

YANARA

NEJU

SENDAI

目次 ● 展示のお知らせ 特別展「谷根千“寄り道”文学散歩」／コラム「観潮楼周辺の映画史跡」上田学(日本学術振興会特別研究員)／展示会場から／コラム「三越・フラングイン・鷗外」田良島哲(東京国立博物館)／これからの催しも 2015年 4月～6月／活動報告 誕生日記念講演会「博物館長としての鷗外—晩年の業績—」実施レポート／ボランティア活動ノート／上半期開館カレンダー／編集後記

展示のお知らせ

特別展

谷根千”寄り道”文学散歩



三入元語同人 明治30年4月

会期 平成27年4月24日(金)ー7月12日(日)
 ※会期中の休館日 5月26日(火)、6月23日(火)
 会場 文京区立森鷗外記念館 展示室1、2
 開館時間 10時~18時(最終入館は17時30分)
 ※6月7月の毎週金曜日は20時まで開館
 (最終入館は19時30分)
 観覧料 一般500円(20名以上の団体・4000円)
 ※中学生以下無料 障がい者手帳(提示の方)と同伴者1名まで無料
 ※各種割引がございます。詳細は記念館HPをご覧ください。

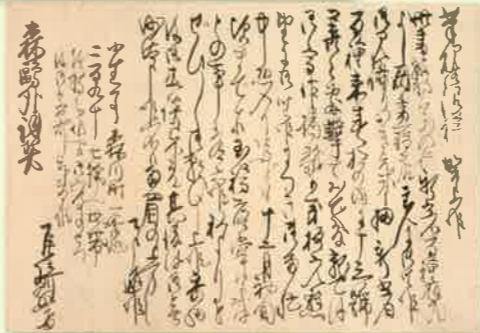
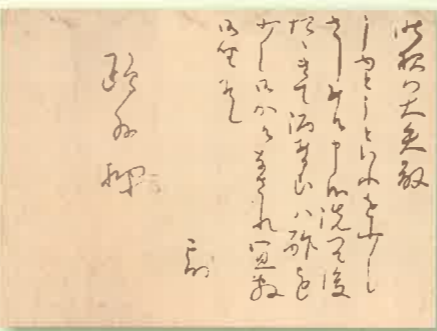
「谷根千」とは、東京は文京区と台東区一帯の谷中・根津・千駄木エリアの総称です。1984年に創刊された『地域雑誌谷中・根津・千駄木』を、地域の皆さんが略称して「やねせん」と呼んだことから、この辺りを示す言葉として浸透しました。東京の中心地に近い立地にもかかわらず、下町風情が残る「谷根千」は、古さと新しさが味わえる町として老若男女に愛されています。「谷根千」はまた、近代文学が花開いた地として、文学散歩スポットが多いことも人気です。今回の展覧会では、谷中は天王寺、根津は根津神社、千駄木は観潮楼(鷗外旧居)にフォーカスしながら、ゆかりの文学作品や文人たちを紹介します。

鷗外の生活圏と重なり合う作品『青年』、谷根千を舞台にした幸田露伴の『五重塔』や夏目漱石の『道草』など、文学散歩ファンにはおなじみの作品を、描かれた場所に残された記憶とともにたどりまします。そして、露伴、漱石、紅葉など谷根千を歩いた文人たちと鷗外との交流をひも解きます。ときどき、「新しい女」たちの「青鞥社」や文豪の娘である森茉莉、幸田文へと、寄り道しながらの文学散歩です。

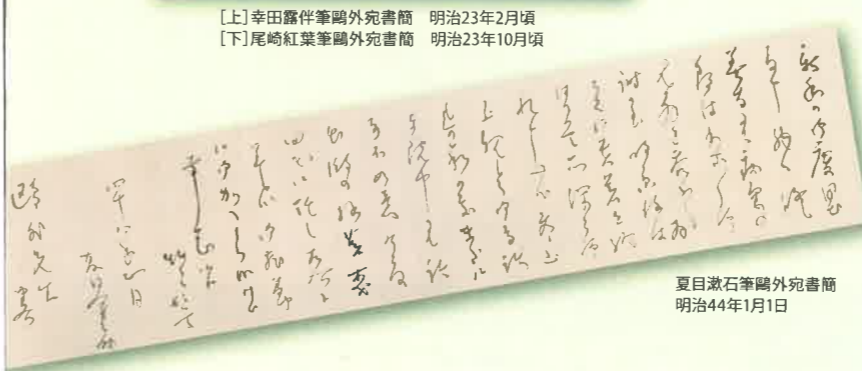
●展覧会図録 執筆者(予定)
 金井景子氏(早稲田大学教授、倉本幸弘氏(森鷗外記念会常任理事)、出口智之氏(東海大学准教授)、中島国彦氏(早稲田大学教授、森まゆみ氏(作家・編集者)、山崎一穎氏(跡見学園理事長・森鷗外記念会会長)【五十音順】



【上】「めさまし草」明治29年創刊
 【右】「青鞥」明治44年創刊



【上】幸田露伴筆鷗外宛書簡 明治23年2月頃
 【下】尾崎紅葉筆鷗外宛書簡 明治23年10月頃



夏目漱石筆鷗外宛書簡 明治44年1月1日

関連事業のお知らせ

特別展期間中に関連イベントを予定しております。いずれも事前申込制、定員50名、当館2階講座室が会場です。申込方法は7頁をご覧ください。

◆講演会

「鷗外と漱石の「谷根千」」

講師 中島国彦氏(早稲田大学教授)
 日時 6月28日(日) 14時~15時30分
 料金 無料
 申込締切 6月13日(土) 必着

「若き日の森鷗外—文事と交友—」

講師 出口智之氏(東海大学准教授)
 日時 7月5日(日) 14時~15時30分
 料金 無料
 申込締切 6月20日(土) 必着

◆朗読会

「幸田露伴『五重塔』を読む」

朗読 内木明子氏(朗読家)
 相模女子大学 早稲田大学非常勤講師
 日時 6月7日(日) 14時~15時30分
 料金 800円
 申込締切 5月23日(土) 必着

「俳優が描く文豪の世界」

朗読 佐川和正氏(文学座)
 日時 6月26日(金) 19時~20時30分
 料金 800円
 申込締切 6月11日(木) 必着

※有料イベント参加者は、当日にかぎり展覧会観覧料が免除となります。

ギャラリートーク

展示室にて当館学芸員が展示解説を行います。

2015年5月13日、27日、6月10日、24日
 いずれも水曜日14時~(30分程度)
 申込不要(展示観覧券が必要です)

コラム

観潮楼周辺の映画史跡

東京にあった映画の撮影所というところ、読者の方々はそのような地名を思い浮かべるだろうか。今でも現役の撮影所が、(祐(東宝)や調布(日活、角川大映)、大泉(東映)に存在するが、一昔前であれば蒲田(松竹)や向高(日活)、熱心な時代劇ファンであれば巢鴨(大都映画)の名前を思い出す方もいるかもしれない。しかし鷗外の生前、邸宅の観潮楼からもほど近い、明治大正時代の日暮里に、撮影所があったことはご存じだろうか。

当時の日暮里には、二つの撮影所が存在していた。一つは、福宝堂という映画会社が一九一〇(明治四三)年に設立した、花見寺撮影所である。日暮里富士見坂を谷中側に下ったところにある修性院(荒川区西日暮里三丁目)、通称花見寺という日蓮宗の寺院の周辺が、その跡地にあたる。当時は小さ

な芝居小屋も立地し、主にその役者が出演して、映画が撮影されたようである。残念ながら、この撮影所から、今日まで知られる傑作は誕生しなかったが、福宝堂自体は、社会現象を巻き起こした探偵映画『ジゴマ』(一九一一年)の配給元として映画史に名前を残している。花見寺撮影所は、一九二二大正十一年に日活が創業し、福宝堂が吸収合併されてしまった後、しばらくして廃止された。

もう一つは、天活という映画会社が一九一四年に設立した、日暮里撮影所である。天活の正式名称は、天然色活動写真株式会社というものであり、イギリスから導入したキネマ・カラーという技術で、不完全ながらも初期のカラー映画を実験的に製作していた意欲的な会社であった。この撮影所からは、「目玉の松ちゃん」で知られた尾上

上田学(日本学術振興会特別研究員)

松之助のライバル、澤村四郎五郎という時代劇のスターが輩出されている。その跡地は、日暮里駅東口から日暮里中央通りを東進した北側にある、太田インキ製造(荒川区東日暮里六丁目)という会社の周辺とされている。天活は日活のライバル会社として、大正時代前期に全盛を誇ったが、日暮里の撮影所は一九一九年に火災により全焼してしまい、その歴史を閉じている。

さて邸宅周辺の撮影所で製作されていた日本映画を、鷗外がどのように考えていたのかは定かではない。しかし、鷗外の周囲にいた演劇人のなかには、当時の映画製作に深く関与した人物が存在していた。その代表的なひとり、鷗外が、ジョン・ガブリエル・ホルクマン(ヘンリック・イブセン)作を翻訳して、その旗揚げに協力した自由劇場の主宰者、小山内薫である。おもに演劇人としての活躍が知られる小山内は、日本初のフィルム式トーキー(発声映画)、『黎明』(一九二七年)を監督するなど、映画製作でも先駆的な試みを数多くおこなっていたのである。彼は、一九二〇年から新しく映画製作に参入した松竹に招聘され、蒲田撮影所で撮影総監督を務めていたが、映画界の慣習に縛られたスタッフの仕事ぶりと相いれず、たびたび対立を引き起こしていた。そこで彼の理想とする「映画劇」を実現するために設立したのが、松竹キネマ研究所であった本郷座(文京区本郷三丁目)の近傍に立地し、わずか一年にも満たない期間で閉鎖されたが、そこで製作された『路上の靈魂』(村田実監督、一九二二年)は、ハリウッドの撮影・編集技術を取り入れた画期的な作品として、今日でも高い評価を得ている。ちなみに本作は『街の子』(ヴィルヘルム・シュミットボン作)と『どん底』(マクシム・ゴーリキー作)を原作としているが、一九一一年に前者の翻訳をおこなったのが鷗外である。

なお観潮楼の周辺には、もう一つ、映画史において重要な場所がある。それは、本郷中央会堂の映画上映会を宣伝する、『読売新聞』(1899年6月12日)の広告。

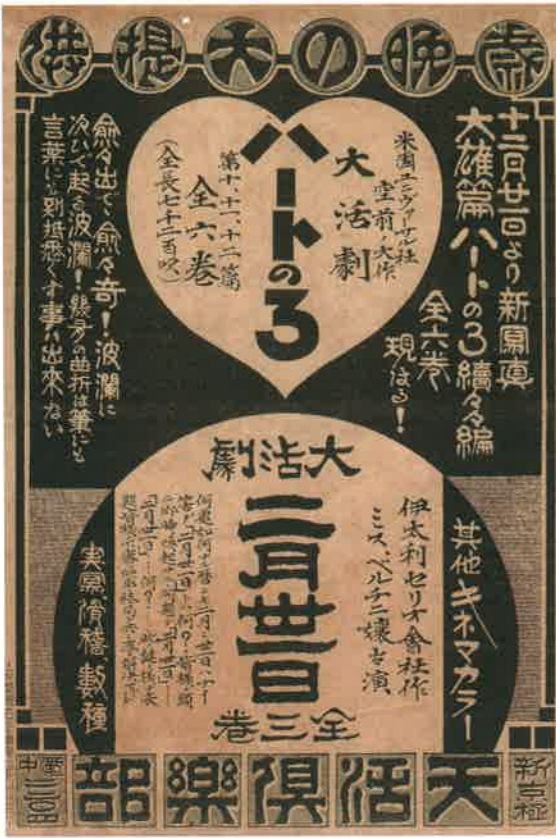


本郷中央会堂の映画上映会を宣伝する、『読売新聞』(1899年6月12日)の広告。

郷三丁目の交差点から春日通りを東進したところにある、本郷中央会堂(文京区本郷三丁目)である。ここは一九九九年に、新橋や葎町の花街で撮影された『芸妓手踊』など、最初の日本映画が上映された場所にあたる。すでに一九一七年、フランス人により日本の風物を撮影した記録映画が製作されており、また外国映画の上映は、日本各地の都市でもおこなわれはじめていた。しかし、小西本店(現在のコニカミノルタ)が製作した最初の日本映画が、はじめて一般公開されたのが、同地にあった当時の本郷中央会堂だったのである。

ヴェネツィア国際映画祭で銀獅子賞を獲得した『山椒大夫』(溝口健二監督、一九五四年)をはじめ、鷗外の小説や翻訳を原作とした名作映画は、今日でも数多く知られているが、鷗外自身が映画製作に関わることにはなかった。文学者自身が映画製作に熱心になり出すのは、谷崎潤一郎や菊池寛、川端康成ら一世代あとのことである。しかし以上のように、生前の鷗外の周辺には、やがて国際的にも高い評価を得ることになる、誕生まもない日本映画の息吹が、数多く存在していたのである。

天活の輸入映画を上映していた京都の映画館、天活倶楽部のチラシ。右下に「キネマカラー」の文字がみえる。(個人蔵)



平成26年、鷗外の三男・森類(明治44〜平成3年)の旧蔵資料を、ご遺族より文京区にご寄贈いただきました。6千点を超える資料の中には、随筆や小説の自筆原稿・日記・書簡・写真なども見られます。文京区立森鷗外記念館では、このたび開館以来初めての「森類の生涯」展を開催し、平成27年3月11日(水)〜4月19日(日)の「森類の生涯」ボンチコから作家へ」展でその一部を公開します。

森類は、明治44年2月11日、父・鷗外(当時49歳)、母・志げ(当時31歳)の三男として、本郷区駒込千駄木町二十一番地(現・文京区立森鷗外記念館)に生まれます。鷗外は「ボンチコ(坊ちゃん)の意」の愛称で類を可愛がりますが、類が11歳のときに亡くなりま



森類



千朶書房にて

鷗外の死後、画家・長原孝太郎、藤島武二に師事し絵画を学び、次姉・杏奴とともにパリに留学します。昭和16年、画家・安宅安五郎長女の美穂と結婚。文筆活動を始め、昭和26年に観潮楼跡地の一角で書店「千朶書房」を開店しました。昭和31年、鷗外の子供たちあとに残されたものの記録を刊行。昭和38年、「小説と詩と評論」同人に参加。晩年は千葉県の日在に身をよせ、平成3年に80歳で亡くなりました。

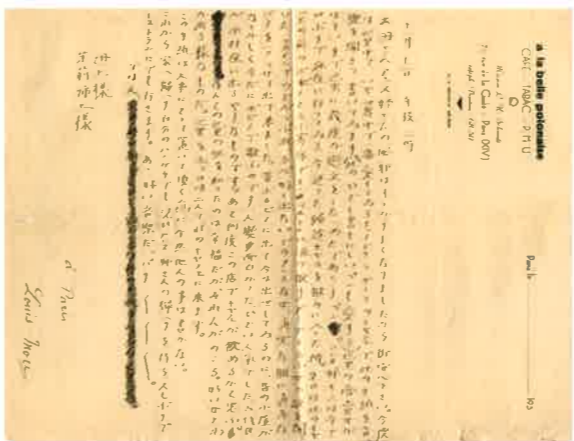
類筆志げ・茉莉宛書簡

昭和8年頃

15歳で中等学校を中退した類は、志げのすすめで絵画を習い始めました。当時東京美術学校教授を務めていた長原孝太郎に師事し、長原邸に月2・3回のペースで通います。川端画学校にも通いはじめ、志げは類のために自宅にアトリエを増築します。昭和5年、長原孝太郎が亡くなったあとは、同校教授だった藤島武二に師事しました。

昭和6年11月中旬、類は絵画の勉強のため杏奴とともにパリに留学します。留学手続は藤島武二と、与謝野寛・晶子夫妻が補助しました。パリでは、アカデミー・ランソンに通い、昭和8年12月に帰国の途につきます。

この手紙は、帰国をまもなく控えた時期に書かれたと思われる、類旧蔵資料の中でも古いものです。書中に出てくるボビノとは、パリ14区モンパルナスにある老舗のミュージックホールで、ダミアは当時の人気歌手でした。パリの生活を心から楽しむ類の姿がうかがえます。

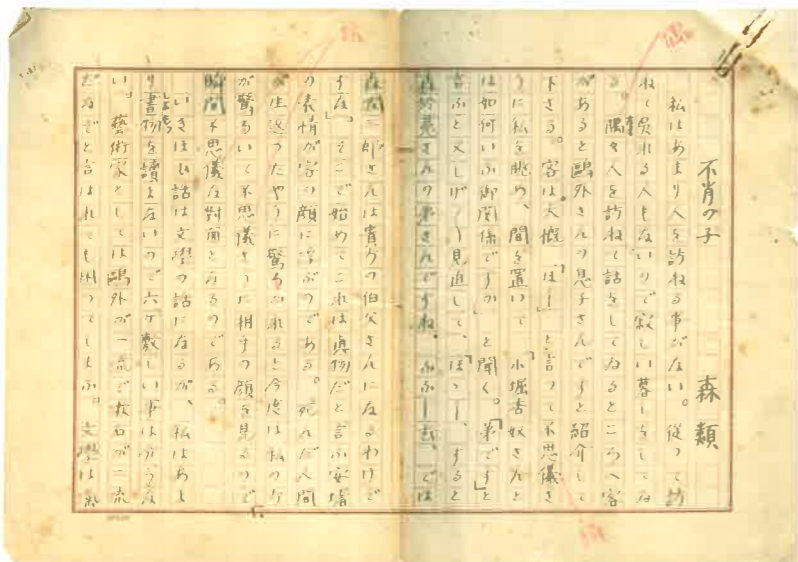


森類 略年譜

- 明治44年(1911) 0歳 2月11日、本郷区駒込千駄木町二十一番地(現・千駄木1-23-4)に誕生。父は鷗外、母は志げ。
- 大正6年(1917) 6歳 4月、誠之尋常小学校入学。
- 大正11年(1922) 11歳 7月9日、鷗外死去。
- 大正12年(1923) 12歳 3月、誠之尋常小学校卒業。
- 4月、高等師範学校付属小学校高等科1年に入学。
- 大正13年(1924) 13歳 4月、国士館中学入学。
- 大正15年/昭和1年(1926) 15歳 国士館中学2年修了時に中退。絵画を習い始める。
- 昭和2年(1927) 16歳 画家・長原孝太郎に師事。川端画学校(春日町)にも通う。
- 昭和6年(1931) 20歳 画家・藤島武二に師事。
- 昭和8年(1933) 22歳 11月中旬、杏奴とパリ留学。
- 昭和11年(1936) 25歳 12月中旬、杏奴と共に帰国の途につく。
- 昭和12年(1937) 26歳 4月11日、志げ死去。
- 昭和16年(1941) 30歳 画家・碓伊之助に師事。
- 3月23日、安宅美穂(安宅安五郎・長女)と結婚。仲人は木下李太郎夫妻。
- 昭和17年(1942) 31歳 8月9日、長女・五百誕生(木下李太郎命名)。
- 昭和19年(1944) 33歳 3月9日、次女・佐代誕生(木下李太郎命名)。
- 昭和21年(1946) 35歳 文筆活動を始める。
- 12月2日、三女・りよ誕生。
- 昭和22年(1947) 36歳 12月13日、長男・哲太郎誕生。
- 昭和24年(1949) 38歳 5月、評論社入社(同年12月退社)。
- 10月、文化学園美術科講師となる。
- 昭和26年(1951) 40歳 1月21日、書店「千朶書房」開店(文京区千駄木19)。店名は斎藤茂吉が命名。
- 昭和31年(1956) 45歳 『鷗外の子供たち』あとに残されたものの記録(光文社)刊行。
- 昭和36年(1961) 50歳 4月30日、書店「千朶書房」閉店。
- 昭和38年(1963) 52歳 3月、「小説と詩と評論」同人に参加。
- 昭和41年(1966) 55歳 『小説と詩と評論』32号から41号まで編集を担当。
- 『柿・栗・苧』が芥川賞に推薦される。
- 昭和44年(1969) 58歳 11月、「小説と詩と評論」同人を退く。
- 昭和51年(1976) 65歳 1月2日、妻・美穂死去。
- 昭和54年(1979) 68歳 10月、小屋恵子と結婚。
- 昭和64年/平成元年(1989) 78歳 『硝子の水槽の中の茉莉』が、『ベスト・エッセイ集・誕生日のアップルパイ』に選ばれ転載。
- 平成3年(1991) 80歳 3月10日、死去。

正誤表

- 昭和19年 (誤) 3月9日、次女・佐代誕生→(正) 3月5日、次女・佐代誕生
- 昭和21年 (誤) 12月2日、三女・りよ誕生→(正) 10月2日、三女・りよ誕生
- 昭和24年 (誤) 文化学園美術科講師→(正) 文化学院美術科講師
- 平成3年 (誤) 3月10日、死去→(正) 3月7日、死去



自筆原稿『不肖の子』

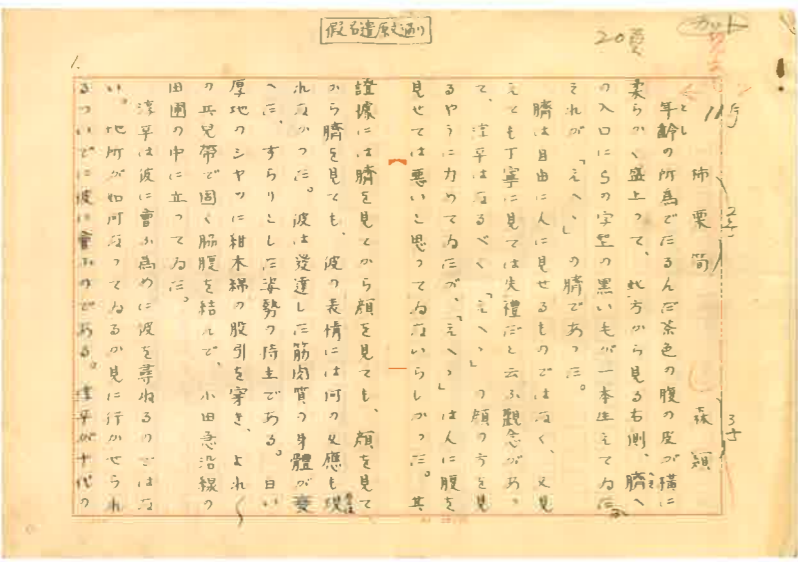
昭和25年

昭和19年、太平洋戦争のため、類は妻・美穂の親戚を頼って福島県喜多方町に疎開します。類は喜多方で、絵画と並行して執筆活動を始めます。『不肖の子』は最初期の随筆で、昭和25年9月発行の雑誌「心」第3巻第9号に掲載されました。鷗外の優しい面影を描きながら、自身のことを「不肖の子」と称して「何故偉い人の子が偉くならないといけないのだらうと思つた」と書いています。類はその後、昭和28年に『森家の兄弟』を、昭和31年に『鷗外の子供たち』を執筆し、同年『鷗外の子供たち』あとに残されたものの記録(光文社)を刊行しました。家族のことや生活の実情を赤裸々に描いた内容は、大きな反響を呼びました。『不肖の子』は、類の死後『森家の人びと』(平成10年、三一書房)に収録されました。

自筆原稿『柿・栗・苧』

昭和41年

書店「千朶書房」閉店後の昭和38年、類は「小説と詩と評論」同人に参加します。「小説と詩と評論」は直木賞作家の木々高太郎が主宰しており、松本清張や柴田錬三郎らが参加していました。類は精力的に執筆し、同人に参加した6年の間に7本の小説と1本の戯曲を発表します。昭和41年には編集も務めました。『柿・栗・苧』は、戦後に神奈川県が生田に住んでいたときに起こった出来事が元になった小説です。生田には志げが生前、類のために購入した土地がありました。戦後の「農地特別措置法」の影響で土地の所有者を巡る事件が起こります。その攻防を描いたこの作品は、直木賞作家の榎葉英治に絶賛され、芥川賞予選作品に推薦されました。結局芥川賞候補にはならなかったものの、類の作家活動の中では高い評価を得た作品です。



【主要参考文献】

- 森類『鷗外の子供たち』あとに残されたものの記録(光文社) 昭和31年
- 山崎國紀『鷗外の三男坊―森類の生涯』三一書房 平成9年

三越・ブラングイン・鷗外

田良島

哲（東京国立博物館）

一九一八年（大正七）六月一日から十日まで三越の画廊で「欧州大家絵画展覧会」が開催された。第一次大戦でドイツの侵攻を受け英国に避難したベルギーの美術家を支援するために企画されたものである。展覧会終了後、展示品であった英国の画家・版画家

博物館への作品受け入れに関する公文書の綴りである『列品録 大正七年』には、次の文書が含まれている。

寄附御願

一 英国フランク、ブラングキン作

エッチング画 壹百〇四点

右画家ノ参考品トシテ貴館ニ寄附致度、別紙目録相添此段及御願候也。

大正七年五月二十七日

フランク、ブラングキン代

三越呉服店社長 野崎廣太郎

東京帝室博物館総長 齋藤 森太郎殿

午前十時頃博物館総長ノ使トシテ西村小六氏入来、明後日ノ同館審査会ニ出席ヲ希望セラル、趣ヲ伝フ。予テ聞及居タル事ナレバ直ニ承諾ヲ与ヘタリ。（六月十五日 日条）

とここで、ブラングインの版画が帝室博物館に寄贈されるに当たっては、総長であった鷗外による業務上の関与があった。この点は先行研究が指摘していないので、関係する史料によって事実経過を紹介したい。

鷗外の日記『委蛇録』大正七年五月二十二日条に「参館。Brangin 画を三越樓上に観る。午餐」という記述がある。一方、黒田清輝の日記の同日条に「午前十一時半頃三越二到り新着ノ油絵及銅版等ヲ観ル。金子子爵・平山氏・森博士・石橋氏等同席ス。午餐ノ饗応アリテ三時頃マデ語ル。瀧博士ハ後レテ来レリ」とある。「金子子爵」は金子堅太郎、「平山氏」はおそらく平山成信、「森博士」は鷗外、「石橋氏」は当時英国在住での展覧会のプロモーターであった洋画家石橋和訓、「瀧博士」は美術史家の瀧精一である。「午餐の饗応があった」というのだから、この席は三越の招待である。三越が展覧会の開会前にこれらの人々を招いたことには無論理由があった。



『列品録 大正七年一』、鷗外の書簡案と三越からの回答書。封筒に鷗外の書き込みと花押が見える。

三越はブラングインの代理人としてエッチングを帝室博物館に寄贈することを申し出たのである。二十二日の招待は作品を紹介し、寄贈の意向を伝える場であったにちがいない。その後の黒田の日記に以下のような記事がある。

「審査会議」とは博物館で作品の寄贈受け入れや購入の可否を審議する「鑑査会議」のこと、この頃は鷗外の出勤に合わせて隔週の月曜日に開かれていた（六月十七日は月曜日）。黒田が「予テ聞及居タル」と言っているのは、鷗外は黒田に対してこの会議に出席し意見を述べよう事前に依頼していたのである。六月十日に展覧会が終わった後に作品は博物館に運ばれ、十七日の会議で館内の職員に披露されたと考えられる。その際、帝室博物館の職員には西洋美術の専門家がいないので、鷗外は黒田のお墨付きを得る形でブラングイン作品の受け入れを決めたのである。

寄贈は決まったが、総長として鷗外にはもう一つ仕事があった。寄贈に対する謝礼の相談である。正式な受け入れの決定に先立ち、七月五日付けで鷗外は野崎宛に書簡を送った。

此ノ如キ場合ノ賞典ハ従来ノ慣例ニテハ三ツ組金杯ニ要ヲ添ヘテ賞勳局ヨリ寄贈者ヘ授与スルニ止マリ、叙勲ノ如キハ先例無之候、右ニテ差支無候哉、

「審査会議」とは博物館で作品の寄贈受け入れや購入の可否を審議する「鑑査会議」のこと、この頃は鷗外の出勤に合わせて隔週の月曜日に開かれていた（六月十七日は月曜日）。黒田が「予テ聞及居タル」と言っているのは、鷗外は黒田に対してこの会議に出席し意見を述べよう事前に依頼していたのである。六月十日に展覧会が終わった後に作品は博物館に運ばれ、十七日の会議で館内の職員に披露されたと考えられる。その際、帝室博物館の職員には西洋美術の専門家がいないので、鷗外は黒田のお墨付きを得る形でブラングイン作品の受け入れを決めたのである。

寄贈は決まったが、総長として鷗外にはもう一つ仕事があった。寄贈に対する謝礼の相談である。正式な受け入れの決定に先立ち、七月五日付けで鷗外は野崎宛に書簡を送った。

活動報告

誕生日記念講演会

「博物館長としての鷗外
——晩年の業績——」

実施レポート

鷗外が晩年、東京国立博物館（当時・帝室博物館）総長を務めていたことは、あまり知られていません。鷗外の誕生日を記念して、総長時代の鷗外について、同館の田良島哲氏をお迎えし、お話いただきました。

大正6年12月、鷗外は帝室博物館総長兼図書頭に就任し、亡くなるまで務めました。講演では、鷗外の勤務の実態や、就任後の博物館経営の変化を、家族や当時の職員の著作、博物館に残る決裁文書や鷗外の論文原稿からご紹介いただきました。当時の鷗外日記『委蛇録』の簡潔な記載を補う資料として、黒田清輝など当時の著名人の日記や著作を引用、豊富な資料を一つひとつ丁寧に語っていただき、好評でした。



日時 1月18日(日) 14:00～15:30
講師 田良島哲氏(東京国立博物館学芸研究部調査研究課長)



フランク・ブラングイン「船を建造する人々」
東京国立博物館所蔵

寄贈に対する賞典は三ツ組金杯と褒状が賞勳局から出るだけで叙勲はないが、それでさしつかえないか、というため押しである。これに応じて三越側からは十三日に「寄贈ニ関スル表彰ノ件ハ御来意ノ通り従来ノ御慣例ニ拠テ御取扱被下候テ異存無之候」という回答があった。『列品録』には、この回答書に鷗外が花押を据えたものを綴じ込んでいる。ここまでの手続きを受けて七月二十日に館内の決裁が整い、二十五日付で正式の受領となった。

多くの場合、博物館への作品の寄贈は担当の職員の発議によって会議にかけられ、総長は最後の決裁を行うだけである。しかし、ブラングイン作品の場合は、当時の博物館では馴染みのない同時代の外国人作家の作品、しかも作家本人からの申し込みということで、総長の主体的な調整が要求される案件となった。あるいは三越側も博物館のトップが鷗外ならば…と考えて、話を持ち込んだものかもしれない。

【参考文献】

- 佐藤みちこ「国立西洋美術館寄託フランク・ブラングインの版画一〇四点の由来について」、『国立西洋美術館紀要』三、一九九八年
- 眞住貴子「石橋和訓のイギリス時代」、『島根県立石見美術館紀要』二、二〇〇八年
- 国立西洋美術館「フランク・ブラングイン」(展覧会図録、二〇一〇年)

ボランティア活動ノート

「鷗外を歩こう」

——小説『青年』をたどる——

実施レポート

何度も話し合いを重ね、2回のシミュレーションを経て、11月9日の雨あがり文学散歩「鷗外を歩こう」がスタートしました。館内を30分程案内したあと、記念館を出発し、敷下通りに出てゴールの根津神社を目指します。途中、鷗外にゆかりのある「猫の家」(鷗外、夏目漱石の旧居跡)や、小説『細木香』に出てくる願行寺、『青年』に登場するテモテ教会に立ち寄り、S坂を歩きました。解説ボランティアの丁寧な説明や、立ち寄った場所が描かれた作品の朗読に、参加者のみなさんは熱心に耳を傾けていました。記念館を飛び出した初めての試みは、館内とは違う趣を味わうことができ、作品に寄り添った道筋は鷗外を身近に感じさせてくれました。



これからの催しもの 2015年4月～6月

催しは全て事前申込制です。各申込締切日必着でお申込み下さい。詳細は、チラシやHPをご覧ください。当館までお問い合わせ下さい。

★応募多数の場合抽選とさせていただきます。

★有料のプログラム参加者はイベント当日にかぎり、展覧会観覧料が免除となります。

★悪天候等やむを得ない事情により、日程・講師・内容を変更する場合があります。

5月16日(土) 11:00～12:30 鷗外講座 基礎編1 『サフラン』—津和野の城下— 講師：倉本幸弘氏(森鷗外記念会常任理事) 料金：無料 定員：50名 申込締切：5月1日(金)	5月24日(日) 14:00～15:30 文の京ワークショップ 朗読ワークショップ 森鷗外『団子坂』を読む 講師：金田瑠奈氏(語り手) 料金：800円 定員：20名 申込締切：5月9日(土) 団子坂での男女二人の掛け合いで構成された小品『団子坂』を声に出して読んでいきます。	6月7日(日) 14:00～15:30 朗読会 幸田露伴『五重塔』を読む 朗読：内木明子氏(朗読家、相模女子大学・早稲田大学非常勤講師) 料金：800円 定員：50名 申込締切：5月23日(土)
5月30日(土) 11:00～12:30 鷗外講座 基礎編2 『青年』—上京する若者— 講師：倉本幸弘氏(森鷗外記念会常任理事) 料金：無料 定員：50名 申込締切：5月15日(金)	6月6日(土) 11:00～12:30 鷗外講座 基礎編3 『舞姫』『棧橋』—留学の時代— 講師：倉本幸弘氏(森鷗外記念会常任理事) 料金：無料 定員：50名 申込締切：5月22日(金)	6月28日(日) 14:00～15:30 展示関連講演会 鷗外と漱石の“谷根千” 講師：中島国彦氏(早稲田大学教授) 料金：無料 定員：50名 申込締切：6月13日(土)
6月20日(土) 11:00～12:30 鷗外講座 基礎編4 『半日』—千叟山房と観潮楼— 講師：倉本幸弘氏(森鷗外記念会常任理事) 料金：無料 定員：50名 申込締切：6月5日(金)	6月26日(金) 19:00～20:30 朗読会 俳優が描く文豪の世界 夏目漱石『道草』を読む 朗読：佐川和正氏(文学座) 料金：800円 定員：50名 申込締切：6月11日(木)	

◆◆文京区立森鷗外記念館イベントの申込方法◆◆

事前申込制のイベントは、各申込締切日までに下記のいずれかの方法でお申込みください。申込みは、1通につき1名様(はがき・Eメールどちらかお一人様1通まで、親子プログラムおよび親子向け推奨のプログラムに関しては親子一組につき1通)、応募者多数の場合は抽選とさせていただきます。申込締切後1週間以内に抽選結果をお知らせします。

- ①往復はがき 往信に参加希望プログラム名・日程・氏名(ふりがな)・住所・電話番号を、返信用には、住所・氏名を明記の上、〒113-0022 東京都文京区千駄木1-23-4 文京区立森鷗外記念館イベント係までご応募ください。 ※日中に連絡が取れる電話番号をご記入ください。
- ②Eメール 件名に参加希望プログラム名・日程・本文に氏名(ふりがな)・Eメールアドレス・電話番号を明記の上、bmk-event@moriogai-kinenkan.jpまでご応募ください。 ※参加可否のご連絡をEメールでいたします。当館からのEメールが受信可能なEメールアドレスをご記入ください。受信制限が設定されている場合、当館からのEメールを受け取れないことがありますので、あらかじめご確認のうえ送信ください。 ※日中に連絡が取れる電話番号もしくはEメールアドレスをご記入ください。

〔ご提供いただきました個人情報は、個人情報保護法に基づき適切に管理し、当該プログラム以外の使用はいたしません。〕

平成27年度前期 文京区立森鷗外記念館 開館カレンダー

4月

日	月	火	水	木	金	土
			1	2	3	4
5	6	7	8	9	10	11
12	13	14	15	16	17	18
19	20	21	22	23	24	25
26	27	28	29	30		

5月

日	月	火	水	木	金	土
					1	2
3	4	5	6	7	8	9
10	11	12	13	14	15	16
17	18	19	20	21	22	23
24	25	26	27	28	29	30

6月

日	月	火	水	木	金	土
			1	2	3	4
5	6	7	8	9	10	11
12	13	14	15	16	17	18
19	20	21	22	23	24	25
26	27	28	29	30		

7月

日	月	火	水	木	金	土
			1	2	3	4
5	6	7	8	9	10	11
12	13	14	15	16	17	18
19	20	21	22	23	24	25
26	27	28	29	30	31	

8月

日	月	火	水	木	金	土
						1
2	3	4	5	6	7	8
9	10	11	12	13	14	15
16	17	18	19	20	21	22
23	24	25	26	27	28	29

9月

日	月	火	水	木	金	土
			1	2	3	4
5	6	7	8	9	10	11
12	13	14	15	16	17	18
19	20	21	22	23	24	25
26	27	28	29	30		

- コレクション展「新収蔵品展PART2 森類の生涯—ボンチコから作家へ」
3月11日(水)～4月19日(日)
- 特別展「谷根千“寄り道”文学散歩」
4月24日(金)～7月12日(日)
- コレクション展「木下幸太郎と鷗外～スバルを中心に～」(仮)
7月17日(金)～9月27日(日)
- 休館日
- 20時まで開館

編集後記

4・5頁に記載の森類旧蔵資料は、平成26年12月に文京区に寄贈され、鷗外関連資料を保管する当館に収蔵されました。新聞などの記事をご覧になった方もいらっしゃるのではないのでしょうか。資料は主に、類がその生を終えた千葉県の日にありました。

寄贈に先立ち、当館スタッフと助っ人の臨時スタッフとで開梱し、仕分け作業を行いました。作業室に籠り、種別ごとに数量や詳細をメモしながら、一つひとつ専用の封筒に分けていきます。書簡や日記の仕分け作業は、類の生涯に触れるかのように、その人となりが見られます。資料は全部で6千点以上ありました。

展覧会ではごく一部しか紹介できませんが、当館では引き続き、調査を進めながら保管に努めて参ります。類の著作は「鷗外の子供たち—あとに残されたものの記録」(光文社、昭和31年)、『森家の人びと—鷗外の末子の眼から』(三一書房、平成10年)で読むことができます。この機会にぜひ一読ください。

前号4頁掲載の、加賀乙彦氏「東独逸時代の鷗外記念館」につきまして誤りがありました。正しくは左記の通りです。

一行目(悉一九五五年)

(正)昭和55年

訂正してお詫び申し上げます。

交通案内



●電車をご利用の場合

- ・東京メトロ千代田線「千駄木」駅 1番出口 徒歩5分
- ・東京メトロ南北線「本駒込」駅 1番出口 徒歩10分
- ・都営三田線「白山」駅 A3番出口 徒歩15分

●バスをご利用の場合

- ・都バス 草63番系統「千駄木一丁目」下車 徒歩1分
 - ・都バス 上58番系統「回子坂下」下車 徒歩5分
 - ・B-ぐる千駄木・駒込ルート「18特別養護老人ホーム千駄木の郷」下車 徒歩5分
- ※一般の駐車場がございませんので、公共交通機関をご利用ください

〒113-0022 東京都文京区千駄木1-23-4 TEL: 03-3824-5511
URL: <http://moriogai-kinenkan.jp>

開館時間 10:00～18:00 (最終入館は17:30)
6月～9月の毎週金曜日は20:00まで開館 (最終入館は19:30)
休館日 毎月第4火曜日(祝日の場合は開館、その他例外あり)、
年末年始(12月29日～1月3日)、及び展示替期間、燻蒸期間等

文京区立
森鷗外記念館
Mori Ogai Memorial Museum